

H-4 日本語受動文における「られ」と「に（よって）」句の範疇と統語的位置

片岡 恋惟（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院/修士課程）

ganbare151826@gmail.com

1. はじめに

これまで日本語の受動形態素「られ」に関しては、動詞、機能範疇、Voice など様々な分析がされてきたが、本発表では2種類の「られ」を仮定する必要があることを示す。また、取り立て詞による「VP 接続テスト」を用い、以下の(1)-(3)の何れの受動文においても「に（よって）」句は従来の多くの分析とは異なり、「られ」よりも上、つまり主節要素であることを論じる。

(1) 直接受動文

先生が学生に（よって）批判された。

(2) 所有受動文

花子が泥棒に指輪を盗まれた。

(3) 間接受動文

太郎が息子に死なれた。

2. 適用分析

2.1 Pykkänen (2008)の分析

・適用主要部 Applicative

(4) 所有受動文

a. 花子が泥棒に指輪を盗まれた。

b. 泥棒が指輪を盗んだ。

(5) 間接受動文

a. 太郎が花子に朝までピアノを弾かれた。

b. 花子が朝までピアノを弾いた。

→ 所有および間接受動文では対応する能動文に比べ、項が1つ増える。

⇒ 追加の項（適用項、applied argument）は適用主要部 Appl(icative)によって導入される。

・所有受動文と間接受動文の違い

(6) 受動文主語と直接目的語の間の所有関係 (Kubo 1993)

a. 花子が泥棒に指輪を盗まれた。（所有受動文）

b. 太郎が花子に朝までピアノを弾かれた。（間接受動文）

→ 所有受動文では受動文主語と直接目的語の間に所有関係が存在するが、間接受動文には存在しない。

(7) 受動文主語の意味的制限 (Kubo 1993)

a. その大手術が山田医師によって執刀を開始された。（所有受動文）

b.*岩が雨に降られた。（間接受動文）

→ 間接受動文では主語に対し「有生」という意味的制限が課されるが、所有受動文では課されない。

(8) 受動文主語が基底生成 (長谷川 2007)

a. 子供達_iが先生に_{t_i}3人髪を切られた。（所有受動文）

b.*子供達_iが先生に_{t_i}3人授業を休まれた。（間接受動文）

→ 間接受動文の主語は主節主語位置に基底生成されるが、所有受動文の主語は移動によって派生される。

・2つの適用主要部 (McGinnis 2001, Pykkänen 2008)

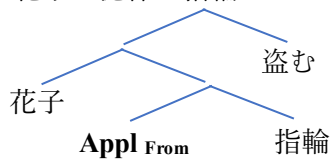
low Appl: 2つの個体（適用項と直接目的語）の間の所有関係を表す。

high Appl: 個体（適用項）と事象（event）の間の関係を表す。

・所有受動文と間接受動文に対する適用分析 (Pylkkänen 2008)

(9) 所有受動文 (low applicative)

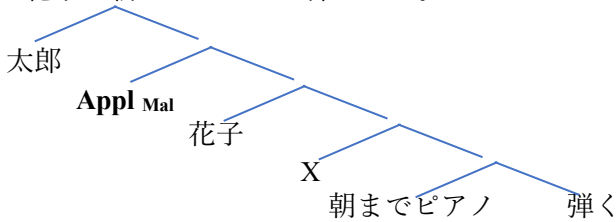
- a. 花子が泥棒に指輪を盗まれた。
b.



→ Appl は「花子」を適用項として導入し、それと直接目的語「指輪」の間の所有関係を表す。

(10) 間接受動文 (high applicative)

- a. 太郎が花子に朝までピアノを弾かれた。
b.



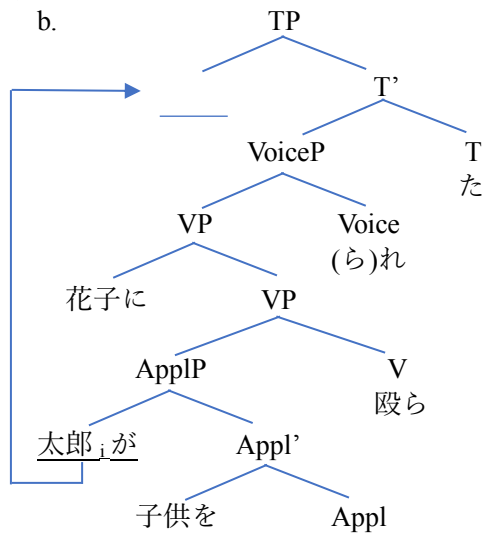
→ Appl は「太郎」を適用項として導入し、それと事象「花子が朝までピアノを弾く」の間の malefactive (被害・迷惑) 関係を表す。

・問題点: 受動形態素「られ」の占める統語的位置および格付与の仕方が明らかにされていない。

2.2 日本語受動文における「られ」の範疇と統語的位置

・所有受動文 (Aoyagi 2010)

- (11) a. 太郎が花子に子供を殴られた。
b.



→ 受動形態素「られ」は Voice であり、Appl は「太郎」を適用項として導入し、それと直接目的語「子供」の間の所有関係を表す。

→ 目的語「子供」の対格に関しては McGinnis (2001) に従い、Appl が付与すると仮定する。

(12) Alice was baked a cake. (McGinnis 2001)

→ v が受動化により格を付与していないにも関わらず、直接目的語 'cake' は格を付与される。

→ Appl が直接目的語に対格を付与している。

・間接受動文 (Kim 2012)

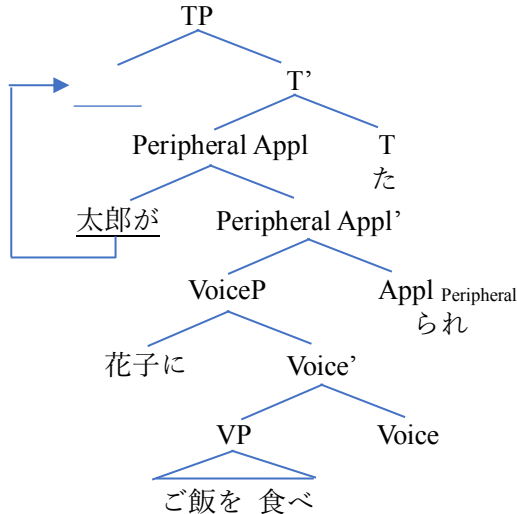
(13) 太郎_iが花子_jにわざと_{ij}腕を折られた。

→ 動作主指向副詞「わざと」は受動文主語「太郎」だけでなく、「に」句「花子」も修飾することが出来る。

→ 「に」句は動作主であり、Voice によって導入される。

(14) a. 太郎が花子にご飯を食べられた。

b.



→ 受動形態素「られ」は peripheral Appl であり、「太郎」を適用項として導入し、それと事象「花子のご飯を食べる」の間の malefactive 関係を表す。

→ 受動文主語は peripheral Appl によって導入され、また「に」句は Voice 指定部に生成される。

2.3 2種類の「られ」を仮定する根拠

・理論的根拠

Voice は能動または受動の2つの値を取り、それぞれ以下の素性を持つと仮定する (Wurmbrand and Shimamura 2017)。能動 Voice は \emptyset 、受動 Voice は「られ」として書き出される。

能動 Voice: [+外項] [+対格]

受動 Voice: [-外項] [-対格]

所有受動文における「られ」は受動 Voice の具現である一方、間接受動文における「られ」はその補部が外項を取り、目的語に対格を付与するため、[-外項] [-対格]の受動 Voice とは考えられない。

・比較言語学的根拠 (Aoyagi 2010)

(15) 日本語

ジョンはメアリーに髪を切られた。

→ 「ジョンはメアリーにジョンの髪を切られた」(所有受動文)

→ 「ジョンはメアリーにメアリーの(あるいは別の人の)髪を切られて迷惑を被った」(間接受動文)

(16) 韓国語

John-i Mary-eykey meli-lul kkakk-i-ess-ta.

-Nom -Dat hair-Acc cut-Pass-Past-Decl

→ 'John had cut his hair by Mary.' (所有受動文)

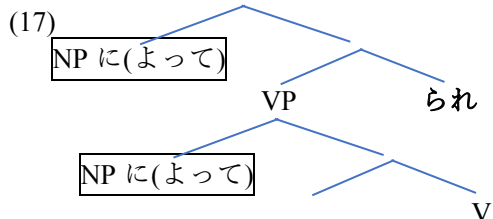
→ '*John was adversary affected by Mary's cutting her (or somebody else's) hair.' (間接受動文)

→ 韓国語には所有受動文は存在するが、間接受動文は存在しない。

→ 日本語の所有受動文と間接受動文における「られ」が同じであるとすると、韓国語にも間接受動文が存在するはずである。日本語の受動形態素「られ」は Voice と Appl の2種類があり、一方韓国語の受動形態素-I は Voice のみであると仮定することで、日本語と韓国語における間接受動文の有無に関する違いを説明することが出来る。

3. 日本語受動文における「に（よって）」句の統語的位置

3.1 日本語受動文における「に（よって）」句の統語的位置の可能性



→ 「に（よって）」句には主節要素と受動形態素「られ」の補部内の要素という2つの可能性がある。

3.2 日本語受動文における「に（よって）」句の統語的位置に関する先行研究

| | 間接受動文 | 直接受動文 | 所有受動文 |
|-------------|---|--|----------------------------|
| 主節要素 | 三原・平岩（2006）、 星（2007） | Kubo（1993）、岸本（2005）、 三原・平岩（2006） | Kubo（1993） |
| 「（ら）れ」の補部要素 | Kubo（1993）、長谷川 （2007）、Hoshi （1999）、Fukuda（2006） | 長谷川（2007）、Hoshi （1999）、Fukuda（2006） | 長谷川（2007）、 Fukuda（2006） |

星（2007）以外の分析では、「に（よって）」句の位置についてはほとんど議論されず、経験的証拠無しにその位置が決められている。

3.3 星（2007）の分析

(18)*[太郎に花子の息子を殴りさえ]、次郎がされた。

→ (18)の非文法性は「太郎に花子の息子を殴る」という連鎖が構成素を成していないためであると考えられる。

→ 間接受動文における「に」句は「られ」の補部内の要素ではなく、主節要素である。

3.4 Kubo（1993）の分析

(19)*[太郎に花子の息子を殴りさえ]、次郎がされた。(= (18))

(20) [花子に高校を辞めさえ]、太郎がされた。

→ Kubo（1993）は星（2007）が非文として判断した(19)と同様の(20)を容認可能と判断している。

(21) [花子に]_i [高校を辞めさえ]_j、太郎が _{t_i} _{t_j} された。

→ (21)では「に」句とそれを除いた部分が別々に前置したと考えられる。

⇒ 前置を用いない統語テストが必要である。

3.5 取り立て詞による統語テスト

・日本語の受動文に対する取り立て詞「も」の挿入

(22) 間接受動文

a.*先生は [花子に泣き] も、[太郎に暴れ] もされた。

b. 先生は太郎に [教室で泣かれ] も、[職員室で暴れられ] もした。

→ 「に」句が受動形態素「られ」の補部の一部であるならば、(a)文は文法的になるはずであるが、実際には非文法的である。

→ (b)文の文法性は、「に」句を除く、動詞句+受動形態素「られ」の連鎖が構成素を成していることを示している。

⇒ 間接受動文における「に」句は、星（2007）の結論と同様、「られ」の補部内の要素ではなく、主節要素である。

(23) 直接受動文

- a. *太郎は [父親に (よって) 殴り] も、[母親に (よって) 叱り] もされなかった。
- b. 太郎は父親に (よって) [家で殴られ] も、[部屋で叱られ] もしなかった。

(24) 所有受動文

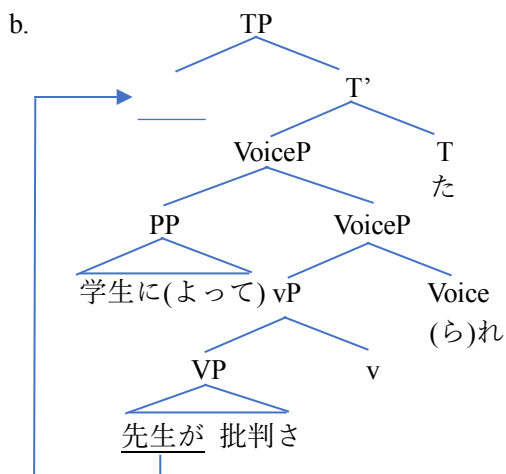
- a. *花子は [子供に花瓶を壊し] も、[泥棒に指輪を盗み] もされた。
- b. 花子は泥棒に [ドアを壊され] も、[指輪を盗まれ] もした。

⇒ 直接受動文と所有受動文における「に (よって)」句も間接受動文同様、「られ」の補部内の要素ではなく、「られ」よりも上、主節要素である。

4 日本語の受動文の構造と派生

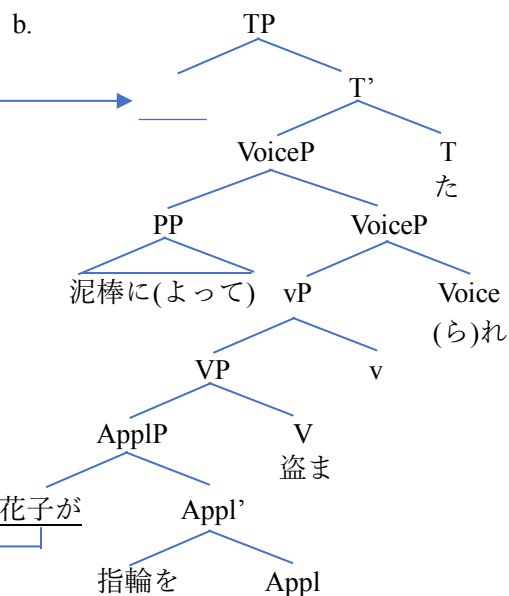
4.1 直接受動文の構造と派生

(25) a. 先生が学生に (よって) 批判された。



4.2 所有受動文の構造と派生

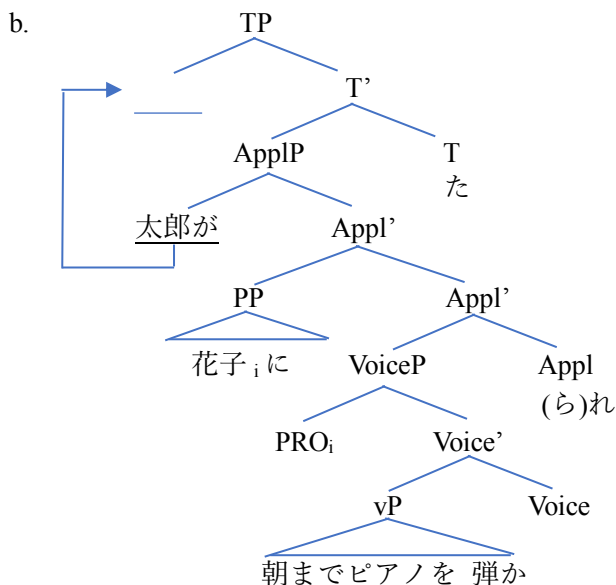
(26) a. 花子が泥棒に (よって) 指輪を盗まれた。



- 何れの受動文においても「られ」は受動 Voice であり、「に」句は VoiceP への PP 付加詞である。
- 所有受動文では VP が Appl 投射を補部として取り、目的語の対格は Appl によって付与される。

4.3 間接受動文の構造と派生

(27) a. 太郎が花子に朝までピアノを弾かれた。



- 「られ」は Appl であり、「に」句は Appl' への PP 付加詞である。
- 目的語「ピアノ」は Voice によって対格を付与される。
- Voice 指定部には「に」句によってコントロールされる PRO 主語が現れる。

5. 間接受動文における「に」句に関する問題

- ・「によって」句との交替不可能性

- (28) a. 先生が学生{に/によって}批判された。(直接受動文)
 b. 花子が泥棒{に/によって}指輪を盗まれた。(所有受動文)
 c. 太郎が花子{に/*によって}朝までピアノを弾かれた。(間接受動文)

→ 間接受動文においてのみ、「に」句は「によって」句で交替することが許されない。

⇒ 「によって」句の補部 DP は動詞「よる」のテ形に埋め込まれているため、PRO をコントロールしないと考えられる。

- ・「に」句の省略不可能性

- (29) a. 先生が(学生に/によって)批判された。(直接受動文)
 b. 花子が(泥棒に)指輪を盗まれた。(所有受動文)
 c. 太郎が*(花子に)朝までピアノを弾かれた。(間接受動文)

→ 間接受動文においてのみ、「に」句は省略することが出来ない。

- (30) 文脈: 太郎の隣の部屋に住む花子はピアノを弾くことが趣味である。

太郎は昨日も朝までピアノを弾かれた。

- (31) a. 死なれて有り難がるのは、葬儀屋ぐらいなものだ。
 b. 店先でけつまずかれたら困るので、道路を舗装した。(柴谷 2000)

→ 文脈がある場合(30)や恣意的指示の PRO_{arb} を持つ場合(31)には、間接受動文における「に」句も省略することが出来る。

- ・「に」句の範疇

- (32) a. 太郎は[子供に 2人死な]れた。(cf. Miyagawa 1989)
 b. 太郎は子供_iに[PRO_i 2人死な]れた。

→ (a)文から「に」句は DP であると考えられてきたが、(b)文のように数量詞は PRO と結び付いている可能性がある。

- ・PRO のコントロール: 通常 PP 付加詞は PRO をコントロールしない。

→ 今後検討する必要がある。

<参考文献>

- Aoyagi, Hiroshi. 2010. On the Asymmetry in Passives between Japanese and Korean. *Papers from the 27th National Conference of the English Linguistic Society of Japan (JELS 27)*, 11-20. / Fukuda, Shin. 2006. Japanese passives, external arguments, and structural case. *San Diego Linguistics Papers 2*, University of California, San Diego. / 長谷川信子. 2007. 「日本語の受動文と little v の素性」 *Scientific Approaches to Language* 6, 13-39. 神田外語大学, 言語科学研究センター. / 星英仁. 2007. 「間接受身文における与格名詞句の統語的性質について」『神戸市外国語大学外国語研究』 67, 19-43. / Hoshi, Hiroto. 1999. "Passives." In Natsuko Tsujimura (ed.) *The Handbook of Japanese Linguistics*. 191-235. Oxford: Blackwell. / 岸本 秀樹. 2005. 『統語構造と文法関係』くろしお出版. 東京. / Kim, Kyumin. 2012. Affectees in subject position and applicative theory. *Canadian Journal of Linguistics* 57(1): 77-107. / Kubo, Miori. 1993. Japanese passives. *Language and Culture* 23, 231-302. The Institute of Language and Culture Studies, Hokkaido University. / McGinnis, Martha. 2001. Variation in the phase structure of applicatives. *Linguistic Variation Yearbook* 1, 105-46. / 三原 健一・平岩 健. 2006. 『新日本語の統語構造』松柏社. 東京. / Miyagawa, Shigeru. 1989. *Structure and Case Marking in Japanese: Syntax and semantics* 22. Academic Press. / Pylkkänen, Liina. 2008. *Introducing Arguments*. Cambridge, Mass.: MIT Press. / 柴谷 方良. 2000. 「ヴォイス」仁田義雄(編)『文の骨格』東京: 岩波書店. 117-186. / Wurmbrand, Susi and Koji Shimamura. 2017. The features of the voice domain: actives, passives, and restructuring. In Roberta D'alessandro, Irene Franco, and Ángel J. Gallego eds. *The verbal domain*, 179-204. Oxford: Oxford University Press.